OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	谷崎潤一郎『細雪』論 : 〈家〉観の交錯
Author(s)	武久, 萌木
Citation	阪大近代文学研究. 2026, 24, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104633
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

谷崎潤一郎『細雪』論
――〈家〉観の交錯――

武久　萌木

はじめに

谷崎潤一郎の代表作「細雪」は、大阪の船場を舞台に旧家の四姉妹の暮らしを描いた作品であり、戦中から戦後にかけて、掲載中止や発表媒体の変更などを経て連載された。「細雪」に関しては、雪子が物語の主題となっているという研究を中心に、多種多様な先行論が存在する(1)。中でも、作中の語りに関する問題がこれまで議論されてきた。「細雪」の語りは、中村真一郎が「側写法」と命名したように(2)、語り手が作中人物の内面に自由に出入りし、読者はその視点を通して物語を理解するものであるとひとまずは言える。しかし焦点化の対象は均等ではなく、大半は蒔岡家の次女・幸子である点に留意するべきである。

近年の研究では、幸子の視点が相対化し得ることを前提に、幸子の認識と物語構造との相互関係を明らかにすることが試みられてきた(3)。特筆すべきは、中村ともえの論である。中村は、「細雪」が日常生活において劇的な展開を求める幸子の予想を否定する展開となることで、谷崎の言う「純客観」(4)を保証していると主張した(5)。中村論は、幸子への焦点化がなぜ採用されたのかという問いに関して、物語内容と関連付けながら論じた点で画期的であったと言える。

さらに言えば、ではなぜ「細雪」という作品においてその試みがなされたのかをも問わねばならない。直近の研究では平中悠一も語りの問題を比較ナラティヴ理論から論じ、本文で推察表現が多用されていることについて「極力常に人物視点をとる」ことにより、「システマティックに非報告文、翻訳調を回避している」(6)構図があるとしている。これに関しても、先ほどの中村論と同様、作品との主題との関わりという視点を新たに加える必要がある。その点に関

して言及した吉田は、雪子によって芦屋の分家を新たな理想の〈家〉とする試みがあったと主張した(7)。この論に一定の説得力はあるものの、それが雪子の「老い」を隠すためという理由や、〈家〉が蒔岡家全員にとって共通のものだという前提については、再考の余地があるだろう。

本稿では、幸子の焦点化の相対化により見えてくる各登場人物の真意こそが、「細雪」の本質でありその原動力であることを明らかにする。その解明のためのキーワードとなるのが、個々人が抱く「蒔岡家」に対するイメージ（以下、「〈家〉観」とする）である。

「細雪」では、登場人物の行動の端々から、自らが属する蒔岡家を意識していることが窺える。しかし、その〈家〉は同一のものではない。むしろ、その〈家〉観がすれ違っていることが、この物語を駆動させているのである。本稿では、本家に属する鶴子と辰雄、そして、分家に属し、幸子の伴侶として姉妹と関わっていく貞之助に注目し、それぞれの〈家〉観を論じていく。この三人は先行論で取り上げられることが非常に少ないが、〈家〉を考える上では欠かせない存在である。本作が見合いと結婚を中心とした家の物語であるからこそ、個々の〈家〉観を紐解いていくことは、本文の読み方を新たに問い直すことになるだろう。

一、幸子の〈家〉観

本章段では、幸子の〈家〉観を考察する。物語の主題を考える上で、彼女から見た蒔岡家を改めて問い直さなければならない。そこで重要になるのが、姉妹たちの母親の存在である。「細雪」の物語内の時間では、既に幸子ら姉妹の母親は没しており、回想にのみ登場する。幸子がその姿を思い浮かべるとき、そこには親しみを越えた、一種の神格化とも呼べるような感情が伴っている。例えば、幸子は若くして亡くなった母を「現在の姉や彼女自身よりも格段に美しい清いもの」（下・八）として想起する。

一般的に、家制度で重視されるのは父親だが、「細雪」において幸子が全盛期の蒔岡家とともに思い出すのは、いつも母親の姿である。さらに蒔岡家の盛衰と母親も、幸子の中で関連している。「全盛と見えた大正の末ごろには、生活の上にも営業の上にも放縦であつた父の遣り方が漸く祟つて来て、すでに破綻が続出しかけてゐた」（上・二）とあるが、その父の奔放な金遣いは病で臥せっていた母の容態にも起因している。母が存命の時には「さしもの父もひとしきりはお茶屋へ足が遠のいた程、夫婦仲がよかつた」が、「母の出養生が始まつてからは、父の遊び方が一層傍若無人

に、「豪遊」と云ふ形式にまで発展して行つた」（下・八）と、周囲の人間からの又聞きによって幸子が認識している。

このような幸子の「母」への敬慕は、雪子への愛情にも影響している。幸子は、雪子に対して他の姉妹より深い愛情を抱いていることを自覚しており、その理由として「誰よりも母の面影を伝えてゐる」（下・八）ことを挙げている。彼女には、「母の身の周りに揺曳してゐた薫りのやうなもの」（下・八）が漂っていると幸子は述べる。幸子にとって雪子は母親を思い出させる媒体、いわば形代のような存在なのだ。

以上のことから、幸子の中で蒔岡家と母、母と雪子が一本の線で結びつけられていると言える。すなわち、幸子の〈家〉観は「母」を中心に形成されているのである。そしてその独自の〈家〉観が彼女を客観的な視点から遠ざけている。それは雪子の見合いが初めて先方に断られた辺りから顕著になってくる。幸子は「蒔岡家だつて由緒正しい家であるのに」（下・一）と憤慨しており、雪子を庇うだけではなく、蒔岡家という家の格についても弁護するような心境であることがわかる。

しかしそのような幸子の話を聞く貞之助の心境は、彼女と同じものではない。貞之助は先ほどの幸子の言葉を聞いて、「言葉を返し得ず」、「さう此方を安つぽく見ては泉下の養父に対しても相済まないし、雪子にも気の毒」（下・一）と考えている。貞之助は、幸子の言い分に賛成することはできない。なぜなら、今の蒔岡家の社会的地位がそれほど高くはないことを、彼は知っているからだ。会社の勤め人であり、世間における蒔岡家の立ち位置を冷静に見る貞之助にとって、幸子の蒔岡家像は過去のものなのだ。この二人のコントラストによって、幸子の〈家〉観と現状との乖離が示されている。

このように、幸子の〈家〉の中心には常に母がおり、物事や人物の判断基準となっている。これは一般的な家に対する価値観とは異なるものであることは明白である。例えば本文の同じ章の中で、戸主の辰雄に対して「義兄の辰雄は母と云ふ人を全然知らないのであるから、何の感じも湧く筈はないが」（下・八）と、突き放したような物言いをしている。家制度では本家の家長として一番上位に位置する辰雄であるが、幸子にとっては蒔岡の血を引いておらず、思い出も共有しない人物として〈家〉の枠外に出されるのである。

そのような幸子の〈家〉観は、物語の後半で雪子にシミができた時から、徐々に形を変えていく。先行論では雪子

の処女性や、構造的に見た蒔岡家の周期性の表れとしてシミが読まれてきたが[8]、本論では、幸子がシミを過剰に意識していることに注目したい。そもそもシミは未婚に由来するものと医師から説明されていたのに、幸子は見合いの成功のためにシミを治そうとしており、目的と手段が転倒している。

これまでの論をふまえると、母の形代である雪子にシミが付くことは、幸子の神聖な〈家〉にとってあってはならない緊急事態なのである。実際、下巻冒頭部の見合いで初めて先方から断られた際、幸子はその原因を根拠もなく雪子のシミに帰している。「もう此れからは今迄のやうな優越的態度を以て「見合ひ」することは出来ない」、「恐らくは此の次の機会にも、昨日のやうにビクビクしながら相手の凝視に妹を晒さなければならないのであつた。」（下・七）という文章からは、幸子が見合いを優劣という観点で捉えていること、そして彼女の過剰なシミへの恐れが読み取れる。「雪」のように真っ白に神格化された〈家〉に文字通りの決定的な汚点としてシミが広がっていくさまは、幸子の信じてきた〈家〉が徐々に崩壊していくことを暗示しているのである。

三、鶴子の〈家〉観

蒔岡家の長女・鶴子に関しては、谷崎自身が後に「大体三人の姉妹を主人公にするつもりであつた」[9]と述べていたこと、また四姉妹の中で唯一離れて暮らしており、登場回数が少ないことなどから、これまであまり論じられてこなかった。小林珠子は、鶴子が「家運の挽回」を目指したと主張したが、あくまで物語内の一部分への指摘にとどまっている[10]。

よって本章段では、鶴子の人物像を改めて明らかにした上で、彼女の〈家〉観に迫りたい。鶴子がどのような人物であるかについては、主に幸子の主観に即して情報が提示される。鶴子の性質は、幸子によって「シツカリ者ではない」（上・二十一）、「単純で人の好い姉」（下・二十一）と評されている。初めに鶴子が登場した上巻部後半でも、幸子は鶴子が「早くから母の代りに父や妹たちの面倒を見た人」で、「昔の箱入娘の純な気質を、今もそのまゝ持つてゐる」（上・二十一）ような性格であるとしている。

ただし、これはあくまで幸子の認識にすぎない。本文を子細に検討すれば、鶴子には幸子が感知していない側面があることが読み取れる。たとえば幸子は妙子の身分違いの

恋愛について鶴子に伝えておらず、そのために姉が何も知らないと考えている。しかし中巻三十三章の会話で、「啓坊の外にも、誰かあるのんやてな」とあり、鶴子が妙子の恋愛について既に知っていたことが明らかになる。この会話において、鶴子は先に事情を知っていながら隠していた幸子に「食休みもしないで」帰ってしまうなど密かな苛立ちを感じていたことが示されている。本家の一員として〈家〉を盛り立てようとしていた鶴子にとって、幸子の行動は裏切りに感じられただろう。またおそらくそれだけではなく、姉として妹に隠し事をされたことに傷ついたのではないだろうか。

鶴子の受難は、下巻に入ってから増していく。下巻冒頭では珍しく本家から縁談が持ち込まれるが、鶴子が幸子への手紙で「菅野の姉さん［註：辰雄の姉］が折角さう云つて来てくれた好意を無にしては、兄さんの立ち場が困る」（下・一）と訴え、とにかく会ってほしいと懇願したことにより、不穏な空気が漂い始める。結局見合いは散々な内容であり、挙句先方から断られるという、蒔岡家にとって屈辱的な結果となった。これに関して、後日貞之助が鶴子の様子について「成るべく姉さんはあのことに触れたがらない風が見えた」（下・八）と幸子に話していることから、鶴子にとっても、夫の立場を考慮した上での、苦渋の決断であったことが窺える。また、例年行う法事に関しても、辰雄が節約のため規模を縮小したことを一部の親戚が非難し、鶴子が間に挟まれて困ったことが本文で示されている（下・八）。このように鶴子は東京で辰雄や彼の実家、分家、親戚などあらゆる方面から板挟みになり、負担が増していた。

その末に、見合いのために東京を訪れた幸子が、雪子を連れ鶴子の家を訪れる。なお、この場面の前には、幸子が「近頃は、本家が虎の子のやうにしてゐた動産の大部分が、株の値下がりで殆ど無価値に等しくなつたと云ふことなので、家計はます〳〵苦しくなつてゐるに違ひなく」（下・三十一）と考えている。つまり、この時鶴子は、経済状況が悪化した本家において、五人の子供を抱えながら、本家としての体面を保つという非常に苦しい立場にあった。この場面において、幸子は鶴子を芝居に誘わなかった負い目から、その場を早く立ち去ろうとしている。一方で鶴子は幸子の後について階段を降りながら執拗に話しかける。さらに家から出て、「車の傍に立ち添ひながらしやべりつゞけた」という様子からは、中巻後半部の時とは打って変わって、幸子たちを引き留めたいという気持ちが強く感じられる。さらに、鶴子が井谷についてしきりに気にかけている様子

を見て、幸子は戸惑いながらも辞去すると、鶴子は「しやべりながら涙をぽろ〳〵こぼし」た。幸子は「井谷の話がこの涙とどう云ふ関係があるのだか、奇異な感じがするのみ」で、その要因に思い当たらない。その後車の中で雪子と話すうち、姉は芝居が見られないことが悲しかったのだろうと結論づけ、納得している。

しかし、ここまでの分析をふまえると、幸子のこの理解は誤りであることがわかる。先ほど述べたように、鶴子は本家の一員としての役割を果たそうと奮闘する反面、経済的には苦しい状況に置かれている。そんなときに訪ねてきた妹たちに対して親愛の情を示すが、鶴子は幸子も雪子も明らかに辞去を急いでいることにショックを受けたのではないだろうか。雪子はおそらく本家への苦手意識のために物理的な距離をとっており(11)、妙子は妊娠を悟られないようにするため、鶴子に会おうとしていないが(12)、その事情は鶴子が知る由もない。その様子を見て、鶴子は心細さに思わず涙を流したと考えることができる。幸子は鶴子の涙の要因を「子供らし」い後悔の念に結び付けているが、実態はむしろ逆である。幸子のこの心境こそ、彼女が好悪の情でしか姉妹の言動の真意を測れないこと、その世界観の限界を示している。

鶴子は東京行きを転機として、夫の実家との板挟みになりながらも、本家の一員として〈家〉を立て直そうとしていた。しかし、鶴子の言動をあくまでこれまで通りの姉によるものとしてしか見ることができない他の姉妹とは徐々に距離が生まれていき、幸子も鶴子の言動を理解できない。そして鶴子は本家の経済状況がいよいよ困窮する中で訪ねて来た姉妹に愛しさを募らせるが、そこでも妹たちが自分を避けるような仕草を目にし、ついに涙を流す。ここでは、鶴子の心境と、幸子とのすれ違いが読者に示されているのである。

以上、本章を通して、幸子と鶴子の〈家〉観の違い、そのすれ違いを確認してきた。ここからは、かつて栄えた蒔岡家の面影を忘れることができず、姉妹の行動を好悪の基準で判断してしまう幸子と、本家に属する者として旧家の体裁を何とか保とうと奮闘する鶴子との対比構造が浮かび上がる。もはや姉妹は、幸子が思うような昔のままの関係性でいることが困難なのである。

四、辰雄と貞之助にとっての〈家〉

本章では、本家の長である辰雄と、分家を支える貞之助

について、まずそれぞれの〈家〉観を確認する。そののち、彼らの〈家〉観が、物語の展開とどのように関係しているのかを明らかにしていく。

貞之助は幸子の夫、辰雄は鶴子の夫であり、どちらも婿養子である[13]。貞之助は計理士として大阪の事務所で勤務しており、和歌を作るなど文学趣味のある人物で、姉妹たちにとっては「本家の兄のやうな監督権を持たな」い、「いろ〳〵の点で雪子たちには、さう恐くない人」であるとされている（上・三）。先行論で東海林は、貞之助の能動性に着目し、「意識的に情報の受信／発信を行う人物」であり、「不都合な情報や教育を隠蔽しようとする姉妹と、それを暴き、上書きしようとする貞之助」という構図があると主張した[14]。東海林の指摘するように、貞之助は雪子たちによる実子・悦子への教育に異議を唱え（上・二十四）、また妙子と奥畑との不健全な交際を本家に伝えるなど（下・十一）、姉妹らの「隠蔽」を暴こうとするという構図が見えてくる。ではなぜ彼はこのような役割を担っているのだろうか。実は、貞之助は姉妹とは異なる形で、自身の〈家〉を守ろうとしている、と言えるのである。

物語を通して、貞之助は蒔岡家の立ち位置を客観的に把握することができる人物として描かれている。例えば彼は蒔岡家の血を引く鶴子や幸子の見合いへの姿勢を、「世間知らずな悠長さ」（上・十四）と評す。また、事あるごとに家名を誇る幸子に対して、彼は配慮するものの共感はしていない。だからこそ、貞之助は見合いの際、周囲への気配りを忘れない。上巻部の瀬越との見合いでは、呑気に身支度をして遅刻する幸子らに「気が気でな」く、事前に井谷に連絡を入れる（上・十）。さらに「名義は井谷の招待と云ふことだけれども、実際の費用は瀬越側と自分たちとで分担すべきものと思つて、帰りがけにそのことを申し出た」（上・十四）と、金銭面でも気遣いを見せている。下巻部の橋寺との見合いでは、幸子が雪子と貞之助の不和を憂うことに終始するのに対し、貞之助は橋寺へ謝罪と交際の継続を願う旨の手紙を書く。橋寺も手紙を返信し、少なくとも表面上は和解することに成功する（下・十八）。蒔岡家は貞之助のおかげで周囲の心証の悪化を緩和し、見合いが続けられているという側面があるのではないだろうか。

では、辰雄はどうだろう。彼は家督を受け継いだ後、代々続く家業を他人に譲り、自身は銀行員として働いている。辰雄は家長ではあるが、他人に暖簾を譲った件や、その後の新聞記事の騒動[15]によって、幸子、雪子、妙子との間には大きな溝が生まれてしまっている。先行論で「戸主と

しては機能していない」[16]と述べられているとおり、物語中で辰雄は「失敗」したと言えるかもしれない。しかし幸子の印象が相対化可能であるという前提を踏まえて辰雄の行動を分析すると、彼の言動を捉えなおすことが可能になる。

上巻二十一章で、辰雄は昇進を機に関西の地を離れ、東京へと転勤することとなる。その理由は「子供たちの数も殖えて、生活費が嵩んで行く一方、経済界の変動や何かで、養父の遺産と云ふものが以前のやうには頼りにならなくなつて来たから」（上・二十一）である。

この引用部からもわかるとおり、辰雄はただ裕福になりたいのではなく、家長としての責務を果たすためにより良い給与を求めている。核家族であれば、彼はここまで困窮することはなかっただろう。辰雄は貞之助一家と違って六人の子と義妹を養わなければならない。なぜ六人も子どもがいるのか。それは本家として跡継ぎを残さねばならないからである。すなわち、辰雄の転勤は旧家意識を離れようとしたものではなく、むしろ本家としての体面を保つための決断であったと見ることができる。

このように、貞之助と辰雄はどちらも、落ちぶれた旧家としての蒔岡家の姿を客観的に捉えながら、その命脈をなんとか保とうとしている。彼らは蒔岡家をなんらかの延命措置なしでは維持できない脆弱な旧家として眼差しているが、旧家としての体面と威厳は保たなければならないという責任感もある。彼らはさまざまなケアを施すことによって、ぎりぎりで〈家〉を保持しておこうとするのである。

五、本家と分家の力学

しかし、貞之助と辰雄の〈家〉観にもずれはある。物語における本家と分家の関係性の変化から両者のずれを見ていこう。

本家と分家の関係を考察する上で欠かせないのが、経済面での優劣に関する検討である。物語では一貫して、本家より分家の方が経済的に豊かであることが示されている。たとえば、姉妹での食事の際には、「幸子の方が金廻りがよいところから、彼女が勘定を受け持つことに極まつて」（中・三十二）いる。また「雪子の世話などほとんど本家の仕送りを受けず、こちらで負担してゐた」（下・二十六）と幸子が語っており、妙子に関する金銭の負担を提案していたりもする[17]ことなどから、分家側で妹二人を養っていると言ってよい状態である。二人の形式的な所属は本家である

ものの、生活としては分家に属しているのである。これは本家と分家の経済的な格差だけではなく、本家が扶養の義務を果たせていない、すなわち辰雄が戸主として機能していない事実をあらわにしている。

もうひとつ経済的な問題として見過ごせないのが、妙子の遺産をめぐる騒動である(18)。妙子と本家の主張が食い違い、結局曖昧なまま流れてしまったが、果たして妙子の遺産はあったのか、あるならばなぜ本家は渡そうとしないのだろうか。妙子の遺産に関する辰雄の言葉は、鶴子の手紙の中で次のように書かれている。

> さう云ふ訳で今預かつてゐるお金を出せと云はれても困る、別にこいさんの名義になつてゐるお金と云ふものがあるのではない、こいさんが婚礼の式を挙げるやうな場合を考へて除けてあるものがないでもないが、理由の如何を問はず請求されたら出す、と云ふやうなお金は預かつてゐないさうです。(中・二十三)

この本文から、辰雄がかなり曖昧な言い方をしていることがわかる。「こいさんの名義になつてゐるお金」というのが遺産であるとすると、遺産は無いが婚礼の際の費用が「ないでもない」と述べていることになる。遺産の有無に関して、幸子は「何でも兄さんが、お父さんから預かっているものがあるいうことは聞いてる」(中・二十三)と発言し、妙子も「将来私に与えるべきものとして兄さんが預かっているものがあることは、富永の叔母ちゃんからも聞いている」(中・二十三)と主張していることからも、妙子への遺産は存在したと考えるのが妥当である。これらの不可解な点と、本家の経済状況が逼迫していることを考えると、本家は妙子への遺産に手を出してしまっている可能性が高い。

その証拠に、幸子が妙子とともに東京の本家宅に滞在する場面では、不自然なほどの辰雄の歓待ぶりが窺える。辰雄が妙子をここまで歓待するのは彼らの関係性を考えると不自然であるが、妙子の遺産への関心を逸らすものであったとするならば筋が通る。本家は扶養の義務を果たせなくなっただけでなく、経済的に他の助けを借りなければならない、非常に不安定な存在になってしまっている。

ではこれらの本家と分家の経済的逆転は、貞之助と辰雄にどのように影響したのだろうか。貞之助は日頃から分家という立場を意識していることが、本文の節々で窺える。彼は雪子たちが分家に入り浸っていることもあまり良く思っておらず、「たゞあまり雪子達の滞在が長くなると、本家

へ気がねして「一遍帰ってもろたら」と幸子に注意する」（上・三）。また、妙子が奥畑との不健全な交際を続けていることに関して、「一往本家の耳へ入れて、兄さんや姉さんの許可を得るか、せめて黙認を得てからにして欲しい」（下・十）と幸子に訴えかけている。姉に気兼ねをしない幸子とは対照的に、貞之助は本家の立場に気を遣っていることがわかる。彼は「自分も本家の義兄と同様に養子の身分なので、今迄義妹の縁談などには努めて深く立ち入らない」（上・十四）ようにしていた。

しかし、見合いを重ねるとともに、貞之助はだんだん積極的に見合いへ関与していく。この変化は、分家に入り浸る雪子と妙子の傍にいることで自然とそういう役回りになったこと、そして経済的に貞之助が雪子を支援する機会が多かったことに由来する。ただし、本来であればそれらは戸主である辰雄の役目である。加えて貞之助は、妙子の件で奥畑に手切れ金二千円を渡し、彼と蒔岡家との関係を絶った。彼は、金銭と手腕で雪子と妙子の問題を解決し、いわば影の戸主となったのである。

自信を得た貞之助は、ついに終盤で「今の場合自分の一存で運んでしまつても差支へないやうに」（下・三十四）思って、本家への通達を軽く見るようになる。しかし彼の振る舞いに、辰雄は抵抗を見せる。物語の終盤、分家が中心となって御牧と雪子の結婚を推し進めた際、貞之助は辰雄にお伺いの手紙を出すが、返信がなかなか来ない。そして彼は辰雄が分家主導で見合いを進めてしまったことに怒りを覚えているのではないかと案じ（19）、「小生は雪子ちやんを小生の家から嫁に行かせようと申すのではない。〔…〕何處までも雪子ちやんは本家の娘として嫁入りすることに変りはない」（下・三十五）と弁明する。

これに対し、辰雄は「雪子のことについて御返事がおくれてゐたのは、別に意味があつたのではなく」「手紙の書きやうに困つてゐたゞけ」であると返答している。手紙の書き方に困っていたというのは、遅れた事情としては不自然だ。実際貞之助が予想していた通り、辰雄は貞之助の独断を不満に思っていたのだろう。辰雄は、あくまで本家の家長である自分をないがしろにしないように、貞之助に釘を刺したのだと解釈できる。

一方結婚費用については、貞之助が「われ〳〵だけの内輪話」として金銭の負担を申し出て、辰雄は「御助力を仰ぎたい」とそれを受け入れている。辰雄は本家の体面を保つため貞之助の援助を受け入れるが、あくまで本家が主体であるという姿勢を貞之助に示す。貞之助はそれをいち早

く察し、本家の面目が立つよう行動する。このエピソードからは、辰雄と貞之助で微妙に本家／分家の関係性に対する捉え方が違ったのだということがわかる。ただしそのずれは、貞之助の配慮によって致命的な亀裂となる前にうまく修正され、〈家〉の決定的な分裂は回避される。

まとめよう。本家は本家としての体面を保つため、金銭的負担も引き受けなければならない。辰雄はその責務のため行動するが、姉妹たちとの軋轢は広がっていく。一方貞之助は分家の家長として蒔岡家の制度を支える実質的な要となる。特に分家が見合いを主導して進めていく過程で分家の存在感が大きくなり、貞之助の心境も変化していく。しかし本家をないがしろにすることを辰雄は許さない。蒔岡の分家と本家のバランスは、制度上家長の立場にいる辰雄と、見合いを主導し経済的な地盤を持った貞之助の緊張感をもった力関係の上に成り立っているのである。そのような緊迫しつつも足並みをうまくそろえていく両者の懸命なケアによって、蒔岡家は危ういところで崩壊を免れることができている。

おわりに

本論文では、「細雪」を各々の人物の〈家〉観から考察し、その主題に迫った。幸子は自身の母を中心とした独自の〈家〉観を抱いているが、物語が進むにつれて、その〈家〉は徐々に崩壊していく。一方、鶴子、辰雄、貞之助は、幸子の知らないところで、各々の〈家〉を守るために奔走していた。鶴子は蒔岡家の栄華を知る者として〈家〉を守ろうとするが、姉妹と本家との板挟みになり、孤独な苦しみを味わう。辰雄と貞之助は蒔岡家をすでに実質の伴わなくなった形だけの旧家として見ているが、両者が微妙な力関係のなかで協力することで、〈家〉が延命されている。

このように、物語を覆う幸子の思考から一歩退き、文中に行き交う〈家〉観を考えたとき、『細雪』は改めてそれぞれの〈家〉をめぐる物語として読み直すことができる。

これから蒔岡家はどうなるだろうか。物語中で辰雄と貞之助は、それぞれ本家と分家の長として〈家〉を支えたが、時代を考えれば、その関係性も急激な変化を遂げたであろうことは容易に想像がつく。貞之助の羽振りが良いのは軍需会社に関係し始めたからであると文中で示されている(20)が、その数年後敗戦を迎えた日本において、貞之助の収

入に支えられた分家の財政状況、つまり本家に対する優位性はひどく脆いものになる。いや、それ以前に蒔岡家が戦争を乗り切れるという保証もない。戦争という圧倒的な暴力を前に、ただでさえ没落しつつあった蒔岡家は生き残れるだろうか。

それぞれが抱く〈家〉観は非常にうつろいやすく、互いに理解することも難しい。「細雪」は〈家〉の「永遠」を願う幸子に焦点化しながら、蒔岡家のはかなさ、いつ〈家〉が崩れ去ってもおかしくないということの、「無常」を描いた物語とも言えるだろう。

注

(1)同時代の言説の代表的なものとしては、折口信夫「細雪の女」(『人間』四巻一号、一九四九年一月)、山本健吉『細雪』の褒貶」(『群像』一九五〇年一一月)などがある。また、『細雪』の重要な研究として、野口武彦『谷崎潤一郎論』(中央公論社、一九七三年八月)、加賀乙彦「円環の時間・『細雪』」(『日本の長編小説』筑摩書房、一九七六年)、秦恒平『谷崎潤一郎論』(筑摩書房、一九八九年)などが挙げられる。さらに、村瀬士朗「代謝する身体の物語―生命現象としての『細雪』―」(「シンポジウム:「細雪」―病の時空―」『国語国文研究』八七号、一九九〇年一二月)の論は、「病」というキーワードを用いて、物語全体を「摂取」と「排泄」という視点から考察した点で画期的なものであった。

(2)中村真一郎『細雪』をめぐりて」(『文芸』一九五〇年五月

(3)幸子への焦点化による物語への影響については、初期に東郷克美「細雪」試論―妙子の物語あるいは病気の意味―」(『日本文学』三四巻二号、一九八五年二月)で指摘された。その論をふまえて、山口政幸『細雪』論―下巻最終部への一考察」(『専修国文』六四号、一九九九年一月)や、高間文香「谷崎潤一郎「細雪」論―目的としての語り」(『近代文学試論』四四号、二〇〇六年一二月)などが、具体的な場面を挙げつつ語りについて言及している。

(4)谷崎は評論「「つゆのあとさき」を読む」の中で、「東洋の小説や物語」のほとんどが「純客観」であったとし、その特徴として「社会相、時勢相、その中に生きる箇々の人間の性格、運命等を暗示し、或は読む者をその境地に引き入れる。いづれにしても、それらは作者の主観を交へない説話であつて、時に依ると、客観的態度があまり極端な結果、作者がいつたい何の目的、何の興味で、こんなに細々と、長々と、架空の事件をまことしやかに物語つてゐるのか、ちよつと底の知れない薄気味悪さを覚えさせる」と述べている。(谷崎潤一郎「つ

ゆのあとさき」を読む」『改造』一九三一年一一月）

（5）中村ともえ『谷崎潤一郎論：近代小説の条件』青簡社、二〇一九年五月

（6）平中悠一『「細雪」の詩学：比較ナラティヴ理論の試み―ナラトロジー、ノン・コミュニケーション、日本の物語理論』二〇二四年四月、一三三頁

（7）吉田夏美「谷崎潤一郎『細雪』論―雪子の〈結婚〉―」『国語と国文学』九七巻四号、二〇二〇年四月

（8）例えば渡部直己は、雪子のシミについて「一方では「永遠の処女」の清さのあかしであると同時に、他方では、それゆえの穢れである点に着目したい」と述べている（渡部直己『擬態の誘惑』新潮社、一九九二年六月、一五五頁）。また東郷克美と熊尾紗耶はともに、蒔岡家の循環する時間に共鳴するように、周期的に浮かび上がるものとしてシミを捉えた（東郷克美「「細雪」試論―妙子の物語あるいは病気の意味―」『日本文学』三四巻二号、一九八五年二月、および熊尾紗耶「谷崎潤一郎『細雪』の雪子にみる時代への拒絶」『国文学攷』二三六号、二〇一七年十二月）。

（9）谷崎潤一郎「「細雪」瑣談」『週刊朝日』春季増刊号、一九四九年四月

（10）小林珠子「谷崎潤一郎『細雪』論―「家運の挽回」を断念する鶴子―」『愛知淑徳大学国語国文』四二号、二〇一九年三月

（11）本文では、「階段の下で待つてゐた雪子は、玄関で姉にさう云ふと、幸子より先に逃げるやうに戸外へ出た」（下・三十一）とある。

（12）妙子の妊娠に関してはこの場面のすぐ後で、妊娠三〜四か月であることが判明する（下・三十一）。妙子の不在について、鶴子はわざわざ「こいさんは？」と問い、「何でやねん。……来てくれたらええのんに」（下・三十一）と口にしていることから、その理由を気にかけ、残念に思っていることがわかる。

（13）二人が婿養子であることに関しては、姉妹の父が「家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎へて分家させた」（上・二）という文章からわかる。

（14）東海林志緒「姉妹を眼差す男達―谷崎潤一郎『細雪』論」『語文論叢』二八号、二〇一三年七月

（15）「新聞記事の騒動」とは、過去に妙子が奥畑と駆け落ちした際、それを報じた新聞が誤って「雪子」と書いてしまったことに端を発する。辰雄は雪子の名誉挽回のため改めて訂正記事を出させるが、雪子と妙子はなぜ不名誉な記事を二度も掲載させたのかと辰雄を非難した。

（16）注14に同じ。

（17）下巻二十六章で、幸子は「お小遣ひぐらゐ上げられる」と話している。本家から妙子への仕送りは、雪子と違って「月々僅かな仕送りをしてゐれば済む」（中・二十四）という態度をとっており、元々仕送りの額は少なかったことがわかる。

（18）これは中巻部で起こる出来事である。妙子が洋裁を本格的に学ぶため洋行を希望し、本家に自らの遺産を渡すことを要求するが、本家は拒否する。妙子は幸子とともに本家を訪れるが、その追及の最中で板倉の危篤の連絡が入り、結局真相は不明のままとなる。

（19）下巻三十五章に、「貞之助はそれにつけても、渋谷の義兄から未だに返事が来ないのが気に懸つたが、本家の態度が妙にはつきりしないのは、雪子の件で義兄が矢張面白くなく思つてゐることもあり、外にも理由があるかも知れないと察せられたので、或る日此方から辰雄に宛てゝ次のやうな趣旨の書面を出してみた」とある。

（20）下巻二十六章。

（たけひさ　もえぎ／兵庫県立東灘高等学校）